

B-6 バリ島周遊

170. 地上の楽園



インドネシアの島の中である意味で最も有名なバリ島はジャワ島の東に連なっている。その面積は5561km²と四国の1/3くらい大きさであるため、17,508あるというインドネシアの島々の中で注意して地図を探さないと分からないような小さな島である。

バリ島の特徴は中央部にそびえる火山である。伝説によるとバリ島の始めは平であった。それでは神が鎮座する場所がないということで山地が付け加えられた。こうして生まれた島の大きさに釣り合いの大きな火山は島の恵となっている。火山は水源地であり、火山は肥沃な土壌をもたらす。水田耕作の最適の条件は豊かな農業に支えた。

火山の連なりは中央より北寄りにある。このためジャワ海（北側）からバリ島を見ると高い山が海岸までせまっておき、急斜面で平地は少ない。これに対して山の裏になる南側は勾配が緩やかに開けた地勢となっている。バリ島の地政からはインド洋が前面でジャワ海が裏面になる。イスラム教を崇めるマレー世界の表海道のジャワ海に対して背を向けている姿勢はバリ文化の“隠れ里”化を招いた。

バリ島が小スンダ列島の一島であるにもかかわらず文化的には他の島から隔離されてかくも固有の文化を維持しえたのは、①バリ海峡の潮流と、②島を取り囲む珊瑚礁とあいまって、③ジャワ海に閉ざしたバリ島の地政であろう。

インドネシアの約30の州の中ではジャカルタ州、ジョグジャカルタ州に次いで小さいが、人口は3百万人弱であり、人口密度は約500人/km²であり、山の多い島の面積の割には過密である。

バリ島の産業は観光とおもわれがちであるが、観光は一部にすぎず、バリ人の大多数は昔も今もやはり農業で生活している。大地の豊穡な生産力がかれらの宗教、芸術、文化に花を開かせた。

バリ (Bali) の語源はサンスクリット語のワリ (Wali) といわれる。ワリとは「捧げる」の意味である。イスラム以前の東南アジア海域を席捲したヒンドゥー教(→719)はこの小さい島に逃れてバリ独特の文化を醸し出した。バリ人の生活は宗教と不可分である。

1930年代にヨーロッパから芸術家が出てきた。バリ島が世界に紹介されるに従いバリ島はユートピアとして知られるようになった。そして今日も観光の島として全世界からバリ島に何かを求めてやってくる。

そしてバリ島へきた人はある限りの形容句でもってバリ島を表現してきた。いわく「地上最後の楽園」「活きた博物館」「神々の島」「天にもっとも近い島」「不思議の王国」「神と華の島」「妖精の島」「祈りの島」「恍惚の島」「神と芸術の島」「地球の臍」「祭りと芸能の島」「陶酔の島」「悪魔の島」「癒しの島」……と限りなく続く。

171. 州都デンパサール市

現在のバリ州8県の行政区画は王国時代(→265)の領域を引き継いでいる。豊穡な南部に小王国が割拠しており、その一つであるバドゥン王国を引き継ぐバドゥン (Badung) 県は東西 10 km に対して南北 80 km と細長い。

そもそもバリ島の道路は棚田に沿って南北に延長している。溪谷を流れる川は自然境界をなしている。現在でも東西を結ぶ道路の発展は遅れている。かつて王国時代に隣の国を訪問するには一度海に出て船で移動して川筋を遡るといった方法であった。

バリ島は高山の存在にもかかわらず島全体の土地利用率は 70% と驚くほど高い。この中でも南部は最も生産力の高い水田耕作の地域である。バリ島の人口もここに集中しており、政治、経済のみならず文化の中心となっている。

「デンパサール (Denpasar)」はバリ州の州都であるが、人口は高々 10 万人であろう。インドネシアの都市を人口の順番に並べれば三十数位というところである。しかしその名前はインドネシアのみならず世界中で知られている。それはバリ島の国際空港のある地名としてである。日本の若い女性には首都ジャカルタの名前よりデンパサールの名前の方がよく知られている。

バリ島は豊かな南を下にして北に広がる扇型に見える。デンパサールはその扇の要の位置にあり、バリ島の中心として急速に拡大したのは地図からも明らかな地の利である。

インドネシア独立後、デンパサールがバリ州の州都となった際にバドゥンという王都の名は改名(バドゥンは県名として残っている)された。デンパサールの語源は“北市場”という安っぽい名前である。従って地元民にはデンパサールより由緒あるバドゥンの名前の方が依然として親しみがあるようだ。

何れにせよ昨今のデンパサールの街自体は車やバイクの喧騒が溢れており、ジャカルタと変わるところはない。メイン・ストリートの名もガジャ・マダ通とかディポヌゴロ通とかジャカルタと同じ名である。

デンパサールは活気は溢れているが最もバリ島らしくない所である。バリ島を訪れる観光客もデ

ンパサールではバリ博物館、アート・センターを訪れる程度である。

植民地時代に蘭印政庁はバリ島行政の統括出先機関を主要航路のジャワ海に面した北海岸のブレレン(→183)に設けた。しかし当時からデンパサールはバリ島全体の経済の中心として重きをなしており、インドネシア独立後にバリ州都となるやバリ島のみならずインドネシア全土から人々が集りバリ島の政治・経済の中心になった。

独立戦争を戦ったバリ人の英雄ングラ・ライ中佐(→324)の名にちなむ空港もデンパサール郊外にあり、島外を結ぶ交通の中心になった。

その他、STSI で知られるインドネシア国立芸術大学(→997)が設けられ、バリ放送局からローカル番組でバリの伝統芸能が放送される。伝統バリ芸能の権威の中心であるのもバリらしい。

172. ププタン広場

デンパサールの都心の官庁街に「ププタン (Puputan) 広場」と呼ばれる一角がある。チャトル・ムカ (CaturMuka) という四面の顔のある守護神の像が目立つ。かなり広い芝生の広場には子供が遊び、祝日には屋台が並ぶ普通の広場に見える。

しかしこの広場はかつて存在したバドゥン (Badung) 王国の王宮前の広場である。1906年9月20日、この広場は王国がププタンによって果てた所であることが広場の名前の由縁である。

オランダがバリ島侵略(→280)に乗り出した頃、バリ島内では小王国(→265)が乱立していた。その一つであるバドゥン王国はオランダに逆らったが、味方するはずの王国には裏切られ援軍の当てもなくなった。蘭印軍に包囲されてもはやこれまでと覚悟した時、王宮はにわかには静まりププタンの準備が始まった。

金銀刺繍^{ししゅう}の華美な衣装を身につける。宝石をちりばめた先祖由来のクリス(→935)を取り出す。やがて金の傘(→788)をさしかけた王を先頭に王族、貴族が女性、子供も従えてガムラン(→910)の演奏とともに蘭印軍に向かってくる。異様な形相の集団である。

銃をかまえる軍の指揮官は停止を命じるが、もとより制止を無視して行進に向かってくる。恐怖にかられた兵士は発砲し、先頭の一団は倒れる。しかし倒しても倒しても屍^{しかばね}を踏み越えて新手が現われる。男の後ろからは恍惚^{うろた}になった女の一団が来る。クリスと槍を手にした子供も向かってくる。

ラジャ (王) の遺体の上に王族の遺体が覆いかぶさる。また新たな一団が現われて同じことが繰り返される。傷ついた者を殺す役目の王宮側の僧を殺せば誰かがその代りを勤める。

これは戦闘ではない、集団自殺である。殺戮^{きつりく}が終わった時、宝石と金銀が散らかる中で華麗な衣装をまとった死骸が累々と横たわる。王弟のいた別の王宮と合わせてその日の犠牲者は4千人といわれる。

ププタンでもってバドゥン王国は滅び、バリ王族の名誉は保たれた。ププタンは王族の威厳ある死に方である。国の滅びの荘厳な儀式であり、バリの美意識の最たるものである。

バリの小王国には籠絡^{ろうらく}されたもの、内紛で自滅したものがあり、すべてがププタンでもって絶えたわけではない。最終的に1908年にクルンクン王国の抵抗もププタンでもって終わった。そしてバリ

¹ ププタンの際、累々たる死骸の下に王族の4歳の男の子が生き残っていた。オランダはこの子を王国の後継者に取り替えた。中田ゆう子著「魅せられてバリ島」はこの元王族ベメチュタン家の経営するペンションでの滞在を縁とした交流記である。

島にオランダの植民地支配が確立した。

ププタンの戦闘に参加したオランダ兵の驚愕はいかばかりであったか。またヨーロッパにププタンの惨劇²が伝えられるやオランダは轟々たる非難をあびた。

その後のオランダのバリ島支配は旧体制をそのまま復活して温存することであった。植民地行政がジャワ島と比べるとマイルドであり、腫物^{はれもの}に触るようにバリ文化を尊重した。これもププタン恐怖の後遺症であろう。

173. ブキット・バドゥン半島

バリ島の東南端はくびれて先は「ブキット・バドゥン (BukitBadung) 半島」になっている。くびれた所が観光客の蝟集^{いしゅう}するクタ (Kuta) 海岸であり、空港もここにある。

ガジャ・マダ(→335)が上陸したという伝説を持つクタは元は小さな漁村であった。西が海に開けているため夕日が美しい。浜辺には外国人観光客がだらしなく寝転がっており、観光客を上回るマッサージ屋やビーチ・ボーイ(→879)が客に群がっている。

狭い海岸通にはホテルやロスメン、レストラン、土産物屋、ブティックがひしめいており、北隣のレギャン (Legian)、スミニャック (Seminyak)、ジンバラ³にまでつながってしまった。車、バイク、歩行者で通は雑踏を極めている。世界中から観光客が集まり、インドネシア中から出稼ぎ者が集まる。金のため人々の目はキラキラしている。ヒッピーが集まった頃ののどかな雰囲気は消えた。

2002年10月、外国人の集まるディスコが爆破され200人近くの犠牲者を出したテロ爆破事件(→751)のあった所である。

スハルト時代の開発政策に従いブキット・バドゥン半島の一画のヌサ・ドゥア (NusaDua) 地域に外国資本によるリゾート型ホテルが誘致された。世界に名の知られた星印が一杯のホテルを国賓などが利用する。

広い敷地には花壇の花がヨーロッパの公園のごとく咲き乱れる別天地である、地元の住民から検問所で隔離された“租界”のような場所でバリの喧騒から静穏を保っている。とってつけたようなバリ風の建築様式であり、門や彫像の装飾品が配置してはあるものの奇麗すぎて場違いの感が強い。バリ島にありながらグアム島やサイパン島と変わる所がない。本当のバリが好きな人はこのようなホテルを避けるであろう。

高級ホテルは地元バリ人の雇用の増加が期待されていたが、実際の従業員はジャワ人が進出している。ジャワ人の方が外国語が得意という言葉の問題もあるが、バリ人従業員はオダラン(→645)休暇が多すぎて労務管理上困るからである。

高級ホテルもこの数年に一気に増え過ぎた、その上に加えてテロ爆破事件の後遺症のあおりを受け、客足は遠のいている。

バリ島の南端のブキット・バドゥン半島の最先端に「ウルワトゥ (UluWatu) 寺院」がインド洋からの荒波の打ち寄せる70^足の石灰岩からなる断崖絶壁の上にある。真っ青のインド洋に転げ落ちん

² ププタンにいたるバリ王国の歴史物語としてウエイ・ハム著・金窪勝郎訳「A TALE FROM BALI(邦訳バリ島物語)」(1997 筑摩書房より再刊)が著名である。

³ ジンバラ (Jimbaran) の丘の上にはGWK (Garuda Wisnu Kencana) という公園ができた。行ったこともないのにケチをつける必要はないが、ゲテモノ好きがいくのであろう。ただし頂上からの眺望はすばらしい。

ばかりで息をのむばかりの荘厳な風景である。夕日が美しい。

ウルワトゥ寺院はバリの寺院の中の格式高い6大寺院の一つである。ブサキ寺院が《山の寺院》であるならばウルワトゥ寺院は《海の寺院》である。悪さのすぎる猿が難点である。

海まで崖を下る細い道があったが、エレベーターがついたそうである。下には派手な格好の若者が集まるサーフィン愛好者のメッカである。インド洋からサーフィンに適した 5~6mの大波が押し寄せる所である。

174. サヌール海岸

観光客にとってバリ島の魅力の一つは海辺のリゾート・ホテルである。「サヌール(Sanur)」、クタ、ヌサ・ドゥアがリゾート地として選ばれたのは砂浜が美しいことである。マングローブの茂る熱帯の海岸には砂浜は意外に少ない。

一部の漁民を除くとバリ人は海岸には住まなかった。リゾート地に適した海浜はバリ人にしてみれば方角として不浄の地(→643)である、現実問題としてはマラリア蚊が多く居住地域になりにくかった。このことがリゾート地をバリ社会から隔離された場所とした。

インドネシア独立後サヌール海岸に本格的リゾート・ホテルが建設され、引き続いて大ホテルが進出した。クタの乱開発の反省から土地の使用が制限されているため、クタのような喧騒はない。従って陸の孤島ともいふべき所でホテルのゴージャスな雰囲気にとひたることができる。そのかわり値段は高い。

ホテルによっては熱帯植物が息苦しいまでに咲き乱れる構内にバンガロー風の коттеージが配置されている。 коттеージと言っても冷房はついている。

サヌールの本格的ホテルは日本の戦時賠償(→362)によって建てられたバリ・ビーチ・ホテルを^{こうし}嘯矢とする。バリ人は異教徒が建てた10階建ての高層ホテルに浜辺に乗り上げた戦艦を見るような不愉快な気分になった。何故ならバリ人にとって高い場所とはアグン山のように神が^{ちんざ}鎮座する所である。アグン山の爆発のためホテルの建設工事が中断されたのはアグン山が怒ったからである。

不評のバリ・ビーチ・ホテル以来、バリでは椰子の木の高さ以上の建物は禁止された。景観の確保といわれているが、高所を聖所とするバリ人の心の深層の問題であろう。

1993年1月20日、バリ・ビーチ・ホテルは火災によって焼けた。この火事にまつわる不思議な話を紹介したい。火事前に女神ロロ・キドゥル(→949)の代理人というマンクゥ師からホテル側に女神専用の部屋を常時キープするようにとの申し出があった。神秘的交信で彼女の指示を受けたということで委任状などがあるわけではないのでホテル側は無視した。女神側は再度、猶予の期限を申し出るも無視された。その結果、起きたのが火災である。ハシゴ車がないので高層建物も丸焼けになったが、死者は出なかった。それ以上不思議なことは彼女の指定した部屋だけが焼けなかった。

ホテル側はホテルの名前をグランド・バリ・ホテルに変えると同時に経営者は心を入れ替えて、代理人をホテルの専従にし、ロロ・キドゥル女神に尽くすことにした。申し出どおり327号室を従者用に、 коттеージ2401号室を女神の専用とした。

女神専用の部屋は見学が可能である。見てきた人の話によると部屋には香がたかれており、調度品

は彼女の好みの緑色一色である。毎日の食事がルーム・サービスで運ばれ、緑色の着替えの衣服も用意してある。怒りっぽい女神の部屋であるから物見高い野次馬気分の見学は後難の恐れがあるので止めた方が無難である。

175. ウブド/バリの心臓部

デンパサールから「ウブド (Ubud)」は直線距離にすると 20 km 強にすぎない。しかしその距離を隔てるだけでいい知れない安らぎが生じる。ウブドこそはバリ文化の心臓部であり、バリ文化を世界に発信する震源地である。

ギャニール (Gianyar) 県に属するウブドが今日のバリ芸術のメッカになっているのは歴史上の経緯がある。オランダ (蘭印政庁) がバリ島に進出してきた際にギャニール王国はオランダと同盟し他の王国を滅ぼしたという芳しくない過去がある。この結果、ギャニール国はオランダ治世下でも旧体制の延長が許容された。

滅ぼされた王国、生き延びた他の王国では国王とは名ばかりでオランダに権力はもとより権威も富も奪われた。このため芸術や工芸品の職人はスポンサーをなくし、ギャニール国へ移住を余儀なくされた結果、ウブドがバリ文化の中心地となった。

現在、ウブド周辺のギャニール県の村々の名は伝統芸術と伝統工芸品で知られている。著名なものを列挙するとガムラン(→917)とバリ舞踏のプリアタン、バリ絵画のバトゥアン、銀細工のチュルク(→930)、木彫りのマス(→933)、竹細工のスカワティ、染織のギャニール、石彫りとバロンダンス(→954)のバトゥブラン(→930)などである。

ウブド付近は古代においてもバリの中心であった。その証はゴア・ガジャ遺跡やイエ・プル遺跡などマジヤパヒト王国に侵略される以前のバリ最古のペジェン王国(→264)の遺跡にも富んでいることである。

近年になってウブドが知られるようになったのは 1920 年代にスピース(→995)などの西欧の芸術家がウブド住み着いてアトリエを設けたことにより、バリ人の絵画芸術が飛躍的に発展する契機になった。この結果、ウブドは特に絵画で有名である。

現在、ウブドにはいくつかの美術館がある。一つは王族チョコルダ・ケデ・アグン・スカワティが新美術のパトロンになり収集した絵画を基に今日のプリ・ルキサン (Puri Lukisan) 美術館となっている。もう一つは画家自身の収集によるネカ (Neka) 美術館である。1996 年にオープンしたアルマ美術館 (ARMA=Agung Rai Museum of Art) はアグン・ライ夫婦のコレクションに基づくもので総合的に充実している。

ウブドは美術館を見るだけで一日はかかる。しかし人がウブドに滞在するのは美術館巡りではなくバリ文化にふれるためである。バリの田園風景と芸術の国際情報が共存するのがウブドの魅力である。

表通りから少し離れたレストランではウブドの溪谷とその向こうに広がる棚田の景色を望める。ウブドはゆっくりとバケーションを過ごし、近辺のどこかで行われるお祭りやお葬式に参加する所である。

ウブドのパサール (市場) はインドネシア各地にある市場と同じである。狭い通路には雑踏と商品

の山で歩きにくい。他所と異なるのは外国人のホームステイ滞在者が野菜などの日用品を買っている光景が日常的であることである。

176. モンキー・フォレスト

ウブドで見かけるロスメン(→852)はリゾート・ホテルと比べると料金が安いのが魅力である。バリ文化に憧れる長期滞在の旅行者はロスメンを利用する。家族的サービスの下宿のようなものもあるらしい。

英語の看板【HOMESTAY】が多いのは外国人の利用者が急増していることを示している。宮殿に住む王族の子孫も民宿をやっているという。しかし最近ではレストラン、土産物店がにわか増えウブドも観光公害がいわれ、クタ並みになってきたといわれる。

ウブドの名所の一つのモンキー・フォレストはその名のとおり“猿の森”である。フータン・クラ(HutanKela)というインドネシア語があるが、英語名が普及したのは観光名所だからである。PuraDalemAgungPadantegalという寺院の境内であるが、寺院の名前は無視されてもっぱらモンキー・フォレストである。

森には数百匹の野生の猿が観光客のくるのを待っている。わがもの顔に観光客を見渡し時々気晴らしに女性のスカートを引っ張るところは高崎山と同じである。観光客が猿の餌を買くと猿の攻勢が始まる。餌の売人のバリ人にはたからないから不思議である。餌はモンキーバナナとピーナッツがあり、安いモンキーバナナを与えても無視しピーナッツ一本に絞っている。

観光客の対応が気に入らなければ眼鏡を持って逃げるのもいる。中にはポケットから財布を抜き出すのもいる。どうして取り返すかという餌の売人か土産物屋に頼めば猿を呼んでくれる。餌の売人や土産物屋と猿が結託けつたくしていると疑いたくなる。

猿がこのように増長したのはインド神話の影響で猿は正義の味方として大事にされているからである。ラーマヤナ(→945)は主人公のラーマ王子が攫われた妻シンタ姫を取り戻すためハヌマンの率いる猿の援軍を得て魔王ラワナと戦うというものである。

ところで猿ならば何でもよいということではない。ラーマヤナの猿は魔王との戦いで尻尾に火をつけられそのため顔が黒くなった。これが由緒正しい猿である。バリの猿を観察するに日本猿よりやや小柄である。顔は灰色で頬髭ほおひげがあるが、それほど美形とも思えないし、また態度もよくない。

日本猿君を改めて見るにズングリムックリの恰好は浮浪者風である。尻尾は太く短くおまけに酔っ払い顔である。時には農家の庭先に忍び込みコソ泥もやるという我が親愛なる日本猿君は“猿品骨柄”に欠けるようだ。

バリ島に猿の名所は3ヶ所ある。ウブドのモンキー・フォレストの他はサンゲエ(Sangeh)とウルワトゥ寺院の猿であり、いずれもノトリアスの方で有名である。サンゲエのブキット・サリ(BukitSari)寺院、別名『モンキー寺院』は伝説の由来がある。ハヌマンが魔王のラワナをマハメル山(→024)に封じ込めるため山を持ち上げたところ、山の一部がサンゲエの森に落ちて以来、猿の森となったということである。

⇒952.神猿・ハヌマン

177. 古都クルンクン市

バリ島東部の「クルンクン (Klungkung) 市」はかつてのクルンクン王国の所在地である。同王国はバリ王国の宗主国であるゲルゲル (Gelgel) 王国を引き継ぐ由緒ある王国であった。デンパサールが東京であるならばクルンクン、ゲルゲルは京都、奈良の関係になるバリ島の古都である。

王国の領土を引き継ぐクルンクン県の人口 16 万人、面積 315k m²でバリ島 8 県の中では最も小さく、小さい面積の半分以上は不毛のプニダ島である。

オランダ侵略前のバリ島の小王国時代にはクルンクン王国はスマラプラ (Semarapura) 王国ともいわれ、中国の春秋戦国時代の“周”のような存在であり、他の王国からは一目おかれた。伝統ある宗主王国としてオランダの侵略に華々しい意地を見せて散った。

19 世紀後半からオランダはバリの小王国を一つ一つ支配下に組み入れ、最後にクルンクン王国が残った。1908 年にオランダ軍に囲まれもはやこれまでと決した王国はププタン(→172)を演じて見事に滅亡した。これによってオランダのバリ全島支配が完成した。

今日のクルンクンは人口 3 万人弱の小都市にすぎない。町の中心である王宮の跡は人車の行きかう喧騒の中であるが、ドカル(→063)という小馬の引く馬車の往来が古都に似つかわしい。

町の中心にあるクルタ・ゴサ (KertaGosa) 宮殿が“浮かぶ宮殿”といわれるのは堀の水に囲まれていたからである。今日の王宮は門を除きププタン戦争で破壊されたので再建されたものであるが、堀と王宮の遺跡に古都の面影をしのぶことができる。

クルタ・ゴサの建物の一部は後に裁判所となり 1942 年まで使用された。裁判所時代の遺物として悪いことをすればどのような罰を受けるかが壁画と天井画で表されている。カマサン様式というバリの伝統絵画(→932)の技法によるものである。

クルンクンの町の南 2km にあるカマサン村はゲルゲル王国の旧跡地である。内紛で王宮がクルンクンに移されて以降は一寒村に落ちぶれた。しかし王族や僧侶の家系の由緒ある寺院が村に残っているため、祭りの日には賑わう。かつての王国の所在地として伝統工芸は今日も盛んである。特にカマサン様式絵画で知られる。

クルンクンの東のアムック湾に面したところにゴア・ラワ (GoaLawah=蝙蝠の^{こうもり}洞窟) に蝙蝠(→072)の名所がある。洞窟を住みかになっているが、入りきれない蝙蝠が洞窟外の岩壁にぎっしりと密集し地肌が見えないほどである。とまって羽根を休める場所がないのか多くの蝙蝠が昼間から飛び回っており、鳥の声と異なり哺乳類の泣き声は耳障りである。

この洞窟はアグン山の火口に通じているといわれる。蝙蝠に恐れをなして誰も入らないから本当のことは分からない。洞窟の側にある寺院は格の高い寺院であるらしいが蝙蝠の糞まみれで悪臭が漂う。

⇒265.バリの小王国

178. アムラプラ市

最東部のカランアセム (Karangasem) 県の中央にアグン山がある。県都「アムラプラ (Amlapura) 市」はアグン山の噴火口から 16km しか離れておらず、溶岩が流れ出す方向にある。1963 年の噴火の際も町のすぐ近くまで溶岩が押し寄せた。厄払いのため、町の名はカランアセムからアムラプラと

改名された。

バリ小王国時代のカラニアセム王国がロンボック海峡を越えて東に向かわざるをえなかったのはアグン山の溶岩の圧力であろう。王国の最盛期は対岸のロンボック島(→212)、スンバワ島(→214)にまで勢力を拡げていた。しかし19世紀になってオランダはバリ王国に侵略の手を伸ばしてきた。

ロンボック島の分家がププタン(→172)で散ったのを座視せざるをえなかったカラニアセム王国はいち早くオランダと提携してバリの他の王国を攻める側に立った。オランダに攻略される過程でバリ小王国の王宮のほとんどは破壊されたが、アムラプラの王宮はバリ島で現存している唯一のものであることはオランダ協力への報奨であろう。

アムラプラの町は標高100mの高台にあり海を見下ろす美しい町並みである。赤レンガを多用し、ヨーロッパ風建築様式を取り入れた王宮の建物は美しい。バリ南部の喧騒から隔離されたようであり、交通が不便な分だけ訪れる観光客は少ない。

東の海岸のチャンディ・ダサ(CandiDasa)は新興のリゾート・ビーチである。クタ、サヌール、ヌサ・ドゥアの人混みとハイコスト化(要は日本人が乗っ取ったということ)に嫌気がさしたオーストラリア人が愛する静かなビーチであったが、ここもまた年々人が増えてきた。バリ島の観光客もリピーターが多くなるとバリ東部も観光地化しつつある。

この地域はインドのガンジーの影響を受けたグドン・バグス夫人がガンジーの思想を実践するために開いたアシュラムがあった。ガンジーの説いた物質に惑わされない質素な生活を目指した合宿所がアシュラムといわれる。アシュラムのメンバーによってそれまで見捨てられていたチャンディ・ダサを修復し、近辺を整備したことが観光地として発展する契機になった。

バリの最東端にスラヤ(Seraya)山がある。高さは1174mにすぎないが、海に突き出た島のような山である。スラヤ山のルンプウヤン(Lempuyang)寺が海の女神であるロロ・キドゥル(→949)の寺院として注目されるようになった。

バリ島にも南海の女王ロロ・キドゥルの神話が伝えられた。ロロ・キドゥルはバリ島が気に入り、サヌールのホテル火災事件以来グランド・バリ・ホテル(→174)を定宿としている。女神にふさわしい寺院がルンプウヤン寺とされたのであろう。

スハルト体制崩壊後の選挙活動でメガワティ(→456)が1998年にバリ島を訪れた際にルンプウヤン寺に詣でて必勝を祈願した。その効験により選挙で彼女の率いる闘争民主党は第1党になり、2001年に大統領になった。

179. 聖なるアグン山

バリ島の東端にある標高3142mの「アグン(Gunung Agung)山」はバリ最高峰である。火をふく聖なる山である。標高3142mは1963年の噴火以前の数値であり、噴火の際の爆発で実際は100mほど低くなっている。

1963年2月19日、数日前からの予兆の後にアグン山は爆発した。1350年以来久しく絶えていた爆発であった。麓のブサキ寺院ではちょうど100年毎の大祭を終えるばかりであった。人々は祭りそのものが爆発の原因でないかと畏れた。

何故なら百年に一回の大祭日は政治的配慮から決められたものであり、正確にバリ歴を計算する

と間違っていた。このような人間のいいかげんさがアグン山の怒を招いたというものである。

あるいは惨劇の予告であったともいう。1965年9月30日事件(→384)に続く共産党狩りの嵐は祈りの島にも共産党員と見なされた多くの人の血が流された。

爆発の際の火砕流の熱雲で1500人が窒息死し、流れ出した溶岩は麓の村を埋め海まで達し、8500人が家をなくした。不思議なことにブサキ寺院だけは溶岩の流れから免れた。降灰は全バリーに被害をもたらしバリー島の農地の1/3は壊滅し不作のため飢饉となり、多くの農民が他の島に移住した。世界から救援の物資が寄せられたが、島民はその援助を拒み、神の怒りを鎮めるため贖罪苦難の途を選んだ。

日本からの直行便がバリー島にさしかかると左手に広がる聖なるアグン山の山塊の威容に見とれると同時に無事通過に安堵^{あんど}を覚える。もし迂闊^{うかつ}なパイロットがアグン山の真上を通過しそこで便所?????、アグン山の怒りを招けばどうなるか。1974年4月パンナム機がアグン山に激突した。バリー人にいわせればこれは単なる事故ではない、飛行機がアグン山の怒りにふれたそれなりの理由があるはずである。

アグン山は単に高いだけではない。アグン山は“聖なる”ものとして存在する。アグンは「偉大な」という意味である。バリー人の信仰の山でありバリー人によればアグン山は世界の中心であり彼らの例えによると世界の臍^{へそ}である。

バリーではアグン山の方角は聖なる方角のカジャ(→643)である。屋敷内の配置はアグン山の方角に家の社^{やしろ}が設けられている。寝る時にバリー人は頭をアグン山の方角にする。偉い人はアグン山の方に座るのがカースト(→642)の仕来りである。アグン山を崇めるのはバリー人の身についた習性である。

アグン山の中腹の千^{せん}のところにあるブサキ寺院はバリー・ヒンドゥー教(→719)の総本山である。ブサキ寺院を正面から眺めるとその背景にアグン山が鎮座している。午後になると雲がかかり全容が見えることはない。裾野の稜線だけを残して隠れたアグン山を背景に黒づくめのブサキ寺院が朦朧^{もうろう}と浮かびあがる。見えないアグン山は一層、神々しさを増す。墨絵の世界に幟^{のぼり}の色が一際鮮やかである。

⇒024.聖なる火山、699.山岳信仰

180. ブサキ寺院

バリー島寺院の総本山として全バリー人によって信仰されてきた「ブサキ (Besakih) 寺院⁴」は聖なるアグン山の約千^{せん}の中腹にある。ブサキ寺院といわれるが、実は一つの寺院ではなく30以上の寺院の集合体である。

核になるパナタラン・アグン (Panataran Agung) 寺院を中心としてバリーの各王国や有力な氏族は寺域の中に各々の寺院を維持した。この中では由緒あるクルンクン王国が最も良い場所を占めている。

ブサキ寺院の歴史は10世紀にさかのぼり、その場所はヒンドゥー教がバリーに広まる以前からバリー人にとってアグン山信仰のための聖所であった。

⁴ バリー・ヒンドゥー教では龍の神、バスキ神が敬われている。バスキ神はアグン山に棲むとされている。ブサキ寺院の名はバスキ神のいるところという意味である。

ジャワ島経由でインドからもたらされたヒンドゥー教にも聖山メールの思想があり、バリ人の山を崇める山岳信仰(→699)の上にヒンドゥー教が重なった。重層信仰(→695)はいわゆるバリ・ヒンドゥー教の特徴の一つである。ブサキ寺院はアグン山と不可分である。

堂々とした石門、ヤシの葉でふいた何百というメールという層になった塔が山のスロープを奥へ奥へと高く拵がり、山体にすいこまれるばかりである。黒色の寺院にブーゲンビリアの赤い花の取り合わせが印象的であった。平地と比べ肌寒かったのは高地のせいばかりではなく、あたりに漂う厳粛な靈気が身を引き締めたのだろうか。

祭りでない日は人影もまばらである。参道には丁子などの農産物が乾燥のため筵むしろに拵げられている。しかし1年に50回あるという祭りの日には赤、黄、白、黒の色鮮やかな幟のぼりがはためき境内の広場は人で溢れる。盛装して供え物を運ぶ美しい行列行進がバリ中からやってくる。昔は山道をもろともせず徒步で来たが、最近ではトラックが愛用されている。バリなりの近代化といえよう。

1979年、ブサキ寺院では百年に一度の“十一方位祭(EkaDasaRudra)”が取り行われた。十一方位とは東西南北の4方角とその中間の4方角、それに上と下と中央という全方位である。全方位とは即ち宇宙であり、善悪のすべてという意味である。

この祭りのハイライトにはスハルト大統領も出席して42日間にわたってバリ島の全島民が参加して盛大に行われた。実は十一方位祭は1963年のスカルノ大統領の在位中に既に実施されたが、祭りの最中のアグン山の爆発のため、やり直しになったものである。

オランダがバリ島を侵略して王国に代わってバリ島を統治した間、ブサキ寺院はパトロンを失い放置されていた。10年になる1917年にアグン山の噴火に伴う地震でブサキ寺院に被害が生じた。この地震は宇宙の秩序を破壊したオランダに対する天罰であるとバリ人は考えた。

オランダは文化財保護の名目で資金援助を行なってブサキ寺院を再建し、バリ人の精神世界を取り込むことで支配者として認められよう努めた。

⇒719.バリ・ヒンドゥー教

181. 国家寺院

ブサキ寺院、ティルタ・エンプル寺院(→010)、ウルワトゥ寺院、ウルン・ダヌ寺院、タナ・ロット寺院、ウルン・ダヌ・バトゥル寺院、バトゥカウ寺院、タマンアユン寺院、プナタラン・サシー寺院、サクナン寺院、ペジ寺院などがバリ島観光案内に出てくる著名な寺院である。

これらの寺院は村の寺院とは異なり王国鎮護の寺院であり、プナタラン(Penataran=国家)寺院といわれる。国家寺院の中でも格が高いものが6大寺院⁵といわれる。ブサキ寺院はその中でも別格であることはいうまでもない。

異教徒の外国人観光客も寺院拝観はできる。ただし肌の露出は覆わなければならない。特に女性のショート・パンツは拒否される。黄色の帯紐おびひもを腰に巻きけるのは齋戒沐浴さいかいもくよくの証⁶である。その帯紐の借

⁵ 6大寺院の具体的な寺院名は時代や地域によって異なるので特定できない。

⁶ 旅行に同行している日本語ガイドのバリ女性が寺院の中への案内をせずに入口で待っているというので後で同行の日本女性が理由を聞くと月のさわりの間は寺院へ入ることはタブーという。バリ人の律義さを実感した

り賃が拝観料代りである。

「タマン・アユン (TamanAyun) 寺院」はデンパサールから 18 kmのムングウィ (Mengwi) にある。ゲルゲル王国(→265)時代に存在したムングウィ王国 (1891 年滅亡) の国寺として創設された。ブサキ寺院につぐバリ島第二の格を有する寺院である。堀に囲まれた広い境内は公園のようである。

「ウルン・ダヌ・バトゥル (UlunDanuBatur) 寺院」はアグン山のブサキ寺院に対応するバトゥル山の寺院である。1917、1926 年のバトゥル山は爆発し寺院は危うく難を逃れた。お告げにより元のカルデラの内側から外側に移動中であつた。

「バトゥカウ (Batukau) 寺院」はバリ第 3 の高峰バトゥカウ山(2276m)の南山麓にある。緑に覆われた休火山に抱かれた寺院らしい安らぎがある。

その他をまとめると「ベジ (Beji) 寺院」はシンガラジャにある。壁面のレリーフが見事である。「プナタラン・サシー (Sasih) 寺院」には“ペジェンの月”といわれるドンソン文化(→981)の青銅の銅鼓を保存している。「サクナン (Sakunan) 寺院」はサヌール沖の小島のスランガン (Serangan) 島にある。バロン・ランドウン (BarongLandung) という大きな仮面人形で知られている。

風光明媚な海の絶景との組合せで有名なのはタナ・ロット (TanahLot) 寺院とウルワトゥ寺院である。伝説の高僧ニラルタ (Nilarta) はゲルゲル王国時代にジャワから招来され、タナ・ロット寺院やウルワトゥ寺院を建立した。ブキット・バドゥン半島の最先端のウルワトゥ寺院(→173)は既に述べた。

タナ・ロットはデンパサールから西へ 30 kmであり、海辺の寺院として著名である。インド洋に突き出た岩島の崖の上に寺院がある。西に広がるインド洋が背景にした夕日は絶景である。落日に輝く海と空をバックにした岩島と寺院のシルエットの光景を見るだけでもバリ島へ行く価値がある。

大空と大海原の合うところくれなみに染め日の沈みゆく澤部孫壽氏歌集より

182. カルデラのバトゥル湖

バリ島の火山は島の北側にあり南へは緩やかなスロープとなっている。この南に広がる火山の裾野には階段状に水田が重なっている。途中にクプクプ (Kupukupu=蝶々) 亭というレストランがある。溪谷と棚田の眺望に歌心もわいてくる。

椰子の木の並び立ちたる溪谷に一筋白く川の流るる

美しき景色飽かずに眺めつつ昼食取れば涼風の吹く (澤部孫壽氏歌集より)

南側から登り詰めたところがペネロカン (Penelokan) である。そこは広義のバトゥル (Batur) 山の外輪山の一角である。初めてペネロカンに着いた時、すり鉢の縁の稜線であることが分かる。そこから見えるのは内側に 20km 幅のカルデラが一望される絶景である。パノラマカメラでも収めきれない雄大な眺めに人は立ち止まり動かない。ちなみにペネロカンは“展望所”という意味である。炎

天下でも通り抜ける風はさわやかで肌寒い。

すり鉢の中に広がる草原の中央はゴツゴツした黒い溶岩の岩山は新しい活火山である。狭義のバトゥル山であり、その高さはまだ1717^{メートル}である。外輪山のアバン (Abang2152^{メートル}) 山の方が高い。

カルデラの東南側の1/3には水色の湖が広がっている。キンタマニ (Kintamani) 村⁷にちなんでキンタマニ湖ともいわれる。バトゥル湖の方が正式の呼称のようであるが、日本人にはキンタマニ湖の方が覚えやすい。声を出して読んでみればわかる。

活火山のバトゥル山は1917年に爆発した。火口原の中の村の1千人が犠牲になり6万人の家が失われたが、不思議と村の寺院は助かった。村は再建され人が舞い戻ったが、1927年に再び爆発した。今度は寺院も埋まったが、最高神だけは無事であった。

神の座を高所に移し人々はまたもやそこで生活していた。1963年の爆発で村は寺院とともに火口原の外に引越した。

人々はバトゥル山にしがみついて生活する。このような危険な所でも人が執着するのは高原野菜作りのためである。野菜というのは温度が適温でなければならない。村は野菜作りで比較的裕福らしい。あるいは観光業にも精を出している人もいるだろう。

バトゥル湖の彼方の片隅に集落らしいたたずまいがかすかに望見される。トゥルンヤン族の住む村である。火口原の中でも爆発の難を免れる位置にある。トゥルンヤン族はバリ・アガ(→660)といわれる人々である。

複式火山であるバトゥル山の標高千^{メートル}の外縁部のペネロカンからキンタマニを結ぶ道は観光道路であると同時にバリ島を縦断する幹線道路である。外縁部の高所にテゲ・コリパン (TegehKoripan) 寺院があり、最高所(1745^{メートル})の寺院からは絶景の眺望が得られる。しかしなおその上にあるのがテレビ中継所である。

⇒661.湖畔のトゥルンヤン族

183. 北部・ブレレン港

「ブレレン (Buleleng)」といわれるバリ北部は山陰に位置し観光で賑わう南部とは対称的⁸である。しかしこの北海岸地方もバリ島の表玄関であった時期があった。オランダ時代は植民地の島々を結ぶ交通は船舶である。

その主要航路はジャワ海の【バタビア⇄スラバヤ⇄マカッサル】を結ぶものあり、ブレレンがその幹線に面していた。戦前に執筆されたバリ紀行の多くはブレレンへの上陸から始まる。

蘭印政庁のバリ島侵略(→280)とその後の支配の橋頭堡^{きやうとうぼ}はブレレンであった。ブレレンの総督はバリ島のみならずバリ島以東の全小スンダ列島の統治者であった。今日ブレレンという名はシンガラジャ (Singaraja) という町の港の名前であると同時にブレレン県として北部一帯の県名になっている。兵庫港・神戸市・兵庫県という関係と同じである。

ブレレンは文化的にも島の南にある多くの王国とは異質なところがある。例えば寺院の様式も祠^{ほこら}

⁷ ペネロカンはバリの観光地から近い外縁部の南側にあり、観光客であふれかえり、物売りも多く俗化が進んでいる。外縁部の北西側のキンタマニ村には観光客も少なくバリの村落のたたずまいが残っている。

⁸ 近年、北部海岸でもリゾート地開発がすすめられ、ロビナ (Lovina) ビーチが人気スポットになってきた。

だけでメール状の塔がない。

19世紀の中頃からオランダによってバリ島では最初に西欧文明がもたらされた。シンガラジャは王国時代のみならずオランダ統治時代の古都にもなる。このため外国人、即ち異教徒の比率も高い。日本で例えるならば長崎の趣がある。

シンガラジャに“ロンタル本”の古文書館がある。バリ島に“紙”が導入されたのはオランダ時代以降であり、それまでの文書はロンタル (lontar) という種の椰子の葉を 35×3 cm程度の大きさに切り揃えたものに鉄筆で刻み^{ナサ}煤を塗り込み^{ヒモ}紐で綴じたものである。

古文書館にはロンタルに記されたバリの歴史、文学書が収集されている。これはオランダ植民地統治の置き土産のようである。文字はカウイ語(→968)であるのでプダンダ(→869)のような限られた人にしか読めない。

シンガラジャから島中央の山地を横切りデンパサールを結ぶ幹線が標高2千米を越える地にブドゥグル (Budugul) という保養地がある。近くのブラタン (Bratan) 湖はブラタン山のカルデラ湖である。標高 1500m の避暑地である。

湖畔から突き出た小島にウルン・ダヌ (UlunDanu) 寺院がある。水の女神デウィ・ダヌ (DewiDanu) を祀る優しい寺院である。深い緑に覆われた山と湖をバックにした絵のような美しい光景である。特に朝霧で少し霞んでいる光景ではどんな下手なカメラマンでも芸術写真が撮れることは請け合いである。

近辺にはハンダラ (Handara) ゴルフ場がある。高地なので気候はさわやかである。東南アジア有数のゴルフ場として評判が高い。自然の地形を活かした緑豊かなコースで湖に打ちこむようなナイス・ショットが出れば一生の思い出になる。

ちなみに私は面白くないからゴルフは40年前に止めた。従ってバリ島まで来てゴルフをやりたい人を理解できない。しかしながらハンダラ・ゴルフ場だけは別らしい。

184. 西部・バリの田舎

バリ島はバリ海峡を隔てジャワ島と対面している。海峡の中は3kmにすぎないが、速い潮流と珊瑚礁の複雑な海底地形のため航行は難しい。海上交通の障害をものともせずマジャパヒト王国(→248)以前からバリ島は海峡を経てジャワ島からヒンドゥー教(→719)とヒンドゥー文化をそっくり移入した。

しかしジャワ島がイスラム教に改宗してからはバリ海峡の潮流を盾にジャワ島から隔離し、独自の文化を熟成させた。遣唐使を廃止した日本の平安時代、鎖国令を出した徳川時代と同じで、ジャワ島と付かず離れずの関係を都合次第で保つことができた。

しかし今日では船にエンジンが取り付けられ、航路も整備され、バリ側のギリマヌク (Gilimanuk) からジャワ島のクタパン (Ketapang) ⁹まで24時間営業のフェリーで結ばれている。ジャワ島からバリ島へバスに乗ったまま15分である。ギリマヌクからの車はバリ西部は無用とばかりひたすら東へ駆け抜ける。

⁹ バニユワギの港

バリ島がインドネシアに統合され、バリ海峡を超えて人の移動が行われるようになった。ギリマヌクではジャワ島からの移住者が増えた結果、バリ島では珍しいイスラム教徒も 20%近くにも達している。

バリ島の最西端に位置するジュンブラナ (Jembrana) 県はヌガラ (Negara) を王都とする王国の領域である。ジュンブラナはジャワ島に最も近いが、バリ島の中心から見ればバリ島の西の辺境であった。バリ島の“本丸”は海峡とジュンブラナという緩衝地帯によって守られてきたといえる。

ジュンブラナ地方は 2000 年近い山地が連なる森林地帯である。原生林のまま残されており国立公園として野生動物が保護されている。かつてはアジア大陸の固有種の虎(→067)が生息する最東端であったが、現在は絶滅した。ジャラック・プティ (Jarat Putih) という絶滅寸前のバリ島固有種の鳥がいる。

大河川がないので灌漑が発達していない。沿岸部に狭い農地があるにすぎない。そこでは競牛(→921)やジュゴグ(→918)という竹製楽器のようなヌガラの伝統文化が保持されている。バリ中央から見れば粗野な感のある素朴な庶民文化である。何でも観光の対象となるバリ島でこの地域だけは圏外におかれてきたが、近年では競牛やジュゴグも観光の対象になり観光客が見られるようになった。

北西部のジャワ海側の行政管轄はブレレン県に属する。平地がないことから過疎地域であったが、これらの地域にも観光開発が押し寄せてきた。温泉付きのリゾート・ホテルが建設され、超高級を売り物にするアマン・グループ(→214)のホテルもある。

沖のムンジャンガン (Menjangan) 島は無人数島であるが、野生鹿が繁殖している。鹿の観察ツアーがあるが、自然保護のため上陸時間も 4 時間に限定されている。島の周辺はダイビング・スポットとして人気が高い。

185. 魔王のプニダ島

クルンクン沖の「プニダ(Penida)島」はサヌール海岸から見える 30 kmの距離である。しかしこの海峡には距離以上の隔りがある。プニダ島は石灰岩からなるカルスト台地の島であり、豊穡なバリ島とは対照的な荒涼とした島である。

アジア大陸とオーストラリア大陸を二分するウォーレス線(→080)上の島にはバリ島で見かけない鳥もいる。

雨が少ない上に灌漑もない、従って米はとれない。この貧相な島に 4 万人の人が生活している。畑作と漁業で生活を支える住民の貧困は風采からも窺われる。これから東に連なる小スンダ列島の厳しい自然を暗示するような存在である。

バリ人はこのような島に似つかわしい諸悪の元締め^{ナミカ}の神様であるジェロ・グデ・マカリン (Jero Gede Macaling) の棲家とみなした。ジェロ・グデ・マカリンは長すぎるので単にマカリンまたはムチャリン (Mecarin) と言われる。長い牙を持つ大魔王である。

バリ島では乾季から雨季になる頃、疫病が伝染するのはこの悪神のせい^{ナミカ}にされている。そこで悪神の機嫌もとるのがバリ人の思考様式である。ムチャリンのお祭りにはバリ中からプニダ島を訪れる。プニダ島と向かい合うバリ島の南側のサヌール海岸の村では魔王ジェロ・グデ・マカリンに向こうを

インドネシア専科

張って善神の象徴としてジェロ・グデ・ルーという大きな人形が作り、両者は夫婦として善悪のバランスを保つ。

ラーマーヤナ(→945)の魔王ラワナの棲家はセイロン(スリランカ)島であることはインドの方角思想から見ると海の先の島は悪者の本拠地になるらしい。インドとセイロン島の位置関係が、バリ島とプニダ島の関係に対比できるのも意味ありげである。

クルンクン王国にとってプニダ島の用途は犯罪者、政治犯の流刑地であった。日本人にとっての八丈島に相当する。『ヌサ・プニダ島』という映画はバリの農民がプニダに送られながらカーストを越えた純愛を貫くというメロドラマであるが、バリ社会の慣習が窺われて興味深い。

プニダ島に隣接しているレンボガン(Lembongan)島はダイビング・ポイントの一つである。日本の軍艦が放置されているのが魚の絶好のマンションになっている。第二次世界大戦中に難破したもので魚のために沈めたものではない。

バリ島を取り巻く海の波の下には珊瑚礁を熱帯魚が泳ぐ別世界がある。しかしバリ人は海を魔物の世界と畏れた。バリ土産にバリ人の描いた海中の絵を買った。緑黒の海中に不思議な生物が蠢いている。まるで海の魑魅魍魎である。

バリ島を訪れる人は社寺仏閣の物見遊山の人ばかりではない。バリの海でダイビングを一度経験するとその魅力にとりつかれるらしい。私は魚でないからダイビングなどしないし、したいとも思わないが、皆がそう言っている。海峡の潮の流れは複雑であるため事故も多い、ロロ・キドゥル(→949)のいることを申し添えておく。

